

舞台の前説 (ライト、1・2・3)

BGM (オープニング・豫告) 流れる  
ライト、暗転 (同時)

―第一幕―

照明・ライトアップ (1・2・3は同時。そのあと上)

ラビ、雑誌を読んでいる。  
トム、舞台脇でゴミ袋を結んでいる

(ラビ、雑誌から目を上げて、トムに呼びかけるように)  
ラ 「トムくん」

ト 「はい」

ラ 「今日、来るよ」

ト 「どちらですか？」

ラ 「二人とも」

ト 「お二人ともですか。今日は大変そうですね」

ラ 「うん。二人とも仲良くしてくれるといいな」

ト 「それもありますけど、綾乃さんも真さんも、少しは先に進んでるといいですね」

ラ 「そうだねえ。ま、何かしら変わったから来るんだろうけど」

ト 「うわードキドキするなあ。あつ、そういえば普通の牛乳、ちよとど切らしてましたよね」

ラ 「そだね。お願いしていい？」

ト 「かしこまりました。ゴミ捨てがてら買ってきます」

ラ 「よろしく」

ラビ、トムが行ったことを確認して、雑誌を閉じる。

ラ 「やてやて」  
ラビ、舞台中央にやってくる。

ラ 「どうも今晚は。私はここにやん月亭の亭主、ラビと申します。皆さんは、ここがどんな場所で、今からやってくる二人がどんなお客さんなのかも分らないと思うんで、ちよとと説明しますね。

まずこのにやん月亭、私と先ほど声だけの出演があったトム君と2人で切り盛りしています。形としては喫茶店ですが、メニューは牛乳オンリー。そしてお客さんは人生に悩む人ばかりがやってくるという不思議なお店です。ちよととストーリーテラーっぽく「不思議な」なんて言ってみましたが、まあ私がそうなるように作ったんです。

これからやってくる綾ちゃんと真っちゃんも然り。

綾ちゃんは、化粧品の大手ドウ・イセコで働いているハイスパックOL。

二十八ですでに結構いいところまで上り詰めてるんですが、今、会社から更なるキャリアアップを求められてるんですって。それだけなら迷う余地なしってところですが、彼女、このタイミングで好きな人ができちゃったんですよ。しかもお相手は小田さんっていう売れないフォークシンガー。フォークシンガーですよ？この平成の世において！もう爆笑したよね。

でもまあ彼女には彼女なりの事情がありますね。超真面目に悩んでるのです。詳しくは、彼女が来てからおおい。

真っちゃんは文具の山陽堂に務めるアラフォーリーマン。すっごい冴えない子なんだけど、今年に入って会社の昇進とお見合い結婚の話がどんとやってきました。うだつの上から平社員生活を続けてきた彼にとっちゃあもう快挙ですよ。ところが、いい加減身を固めましょうかと思っただけの事件が、彼の大学時代の先輩、ノブさんって人が山陽堂に入ってきたんです。しかもアルバイトで。彼の登場で、なぜ真っちゃんがここに来るようになったのか。それもまあ、おおい。

(ドアの方をみてさて、そろそろ来る頃かな。うーん、牛乳のこととか詳しく話す時間はないか。

あそうだ、最後これ言っとかないと。ウチのトム君はですね、半分人間で半分――」

ドアが開く。綾乃登場。酔っている。

綾 「ラビさん、やっぱいろいろだめだー」

ラ 「あら、おいでなすったね。こんばんは、綾ちゃん」

綾 「へへっ、もう仕事も手につかないや」

綾乃、体を引きずるようにイスに向かいながら  
綾 「へへっ、もう仕事も手につかないや」  
綾乃、イスにすわるやいなや突っ伏す。  
顔だけラビに向けて

綾 「お酒に逃げちゃいました」

ラ 「あらあら。綾ちゃん、お酒弱いつってなかったっけ？」

綾 「ですけどね、もう、飲まずにはいられないってやつですよ」

ラ 「あらあら。前回から一週間くらいかな。その後何があったの？」

綾 「それがですねえ！（体を起こしながら、ふと気付いて）  
あれ、今日トムさんは？」

ラ 「牛乳買いに行ってるよ」

綾 「えー、スグ飲みたかったのに」

ラ 「まあお待ちなさい。もうそろそろ帰ってくると思うよ」

綾 「待てない待てないー」

ラ 「あはは、最初来たときはなんで牛乳しかないのよーって怒ってたのに」

綾 「それがもう、ここのミルク無しでは生きていけない体…」

ドア開く音。

ラ 「あつ、ほら帰ってきた。ん？(つぶつぶした綾乃をみながら)

トム、買い物袋携えて登場

ト 「戻りました。あつ、綾乃さんどうも……ありゃ」

綾乃、つつぷして寝ている

ラ 「来て早々このありさまですよ」

ト 「あら。綾乃さん飲める方でしたっけ？」

ラ 「飲めないのね、お酒に逃げちゃったんだって」

ト 「あらら」

トム、綾乃の肩をさすりながら

ト 「綾乃さん！いったいなにがあったんです！大丈夫ですか？」

綾乃、起き上がって突然トムの尻尾をつかむ

ト 「うおっ！」

綾 「ああ、このモフモフ、やっぱり落ち着く」

ト 「綾乃さん！離して下さい！もたれるとぞわぞわするって言ってるじゃないですか」

綾 「だって気持ちいいんだもん」

ト 「気に入っていただけるのは嬉しいんですが……ご遠慮ください」

トム、綾乃の手から尻尾をひったくる

綾 「ああん」

ラ 「あはは、綾ちゃん、なんかいつもと全然キャラ違うね。こっちのが可愛いね」

ト 「それは正直否定できませんが……とりあえず、水をお持ちしますね」

トム、カウンター裏に移動

綾乃、ぼーっとした状態から何かを思い出したように

綾 「ラビさん、私ね、もうダメ」

ラビ、綾乃の頭をなでながら

ラ 「よしよし。大丈夫だよ」

ト 「さぎ、お水、持ってきましたよ」

綾乃、つつぷしてラビに撫でられながら、超リアルな猫の声で

綾 「んー……にゃあ」

トム・ラビ、一瞬顔見合わせる。綾乃、何かに気付いたようにぱっと体を上げる

綾 「あれ、なんか今猫の声しませんでした？」

ラ 「外で泣いてたのかもね」

ト 「わっ、私も遠くで聞こえたい気がします。綾乃さん、耳がいいんですね」

綾 「そっか」

綾乃、水を飲み、ふはっと一息ついて

綾 「でね？私、今日上司から“急に”ですね？」

ドア、いきなり開く。真登場

真 「トムさん、ラビさん、やっぱ僕だめです」

ラ 「おっ、おいでなすったね」

ト 「真さん、今晚は」

真 「大変なことになりました」

真、テーブルにずかずか歩み寄る

真、テーブルについて、つつぷす

真 「だってさあ、いきなりそんなこと言われても。よりによってこんなタイミングで」

ラビ、綾乃に向かって

ラ 「今日にはぎやかだねえ」

綾 「ん？誰？」

トム、真をゆすりながら

ト 「真さん、すみません、登場が弾丸過ぎます。綾乃さんびっくりしてますよ」

真 「えっ、あっ」

真、上体を起こして、綾乃と顔を見合わせる。  
綾乃、真、トムラビに向かって

真 「この人は」

綾 「誰ですか？」

ト 「そっか。お二人で会うのは初めてですもんね」

ラ 「そだね。綾乃ちゃん、こちらは『いつも心にコンパスを。文具の山陽堂』勤続十五年のアラフォーリーマン、真っちゃんだよ」

綾 「山陽堂！うわ懐かしい。小学校ん時、定規とか使ってたわ」

真 「どっ、どっも、真田真です」

綾 「初めまして。なんか超地味な方ですね。定規みたい」

ト 「いや、綾乃さん？」

真 「いきなり失礼だなあんた！トムさん、なんですかこの人はっ」

ト 「えーっとこの方は、『百年先の肌に潤いを。ドウ・イセコ』  
新宿エリアマネージャーの東条綾乃さんです」

真 「えっ、ドウ・イセコって、あの化粧品最大手の？」

ラ 「そうだよ。しかもこの若さでエリアジャーマネだからね。この子凄いですよ」

綾 「どうもーハイス・ベック〇」の綾乃ですー」

真 「うーん、この有様みる限り全然そうは見えないんですが・・・まあ、よろしくお願いします」

綾乃、真を不満げに睨む

真 「・・・目が怖い！一体何が気に入くわんのですか」

綾 「今日はトムさんラビさんにゆっくり話聞いて貰おうと思ったのに。私、今、大変なんですよ」

真 「いや僕だってそうですよ！アンタがいるから詳しく話せないじゃないか」

ト 「まあまあ二人とも、落ち着いて下さい。どうでしょう、今日はお二人の悩みをみんなで聞いて、次どうすればいいか一緒に考えるというのは」

綾 「えーっ、イヤですよ他人に聞かせる話じゃないし。それにこんなオジサマが乙女に役立つアドバイスしてくれるとはとても」

真 「ざらりと自分のこと乙女って言ったなこの人。僕だってイヤですよ。恥ずかしいし。この人絶対バカにしますもん」

ト 「仲良くしましょうよ。綾乃さんも真さんも、これまで私とラビさんに話してくださいましたのは、きっとそういうことですが、根っこは同じだと思えます。そうですよね、ラビさん？」

ラビ、椅子に座ってポケットから取り出した木の玉をもてあそびながら

ラ 「うん、似てるよねえ」

綾 「ええ、本当ですか？」

真 「どういう点が？」

ト 「それを今から伝え合おうんです。今日お二人が同じタイミングでここにいらしたのは、きっとそういうことです。私とラビさんだけじゃなくて、他の人にも交えたほうがいいって、牛の神様が言ってるんですよ」

ラ 「同じ悩みを抱える者同士だからこそわかること、きっとあると思うよ」

綾 「まあ、二人がそういうなら・・・」

真 「あんまり気が進みませんが・・・やってみます」

ラ 「決まりだね。おっと」

木の玉、ラビの手を離れてテーブルの上へ。

真・綾乃、反射的に玉に手を伸ばして止める。人の反応じゃない

ラ・ト 「あっ」

綾 「やだっ」

綾乃、真の手に重なった自分の手を即ひっこめる。

ト 「おっ、お二人とも、反射神経いいですね！」

ラビ、トムに言葉を飛ばすように  
ラ 「まるで猫のようですね」

ト 「ええ・・・」

綾 「なんだろう、なんか今無意識に手が伸びた」

真 「僕も。何だったんだ今の」

ラ 「トム君、とりあえず牛乳牛乳」

ト 「あつ、そうでしたそうでした」

トム、冷蔵庫に向かう

綾 「トムさん早くー」

真 「ああ、僕も早く飲みたいです」

ト 「はいはい。ただ今」

ラ 「あはは、二人とも立派なミルクジャンキーだね」

ラ 「じゃ、まずは綾ちゃんから行ってみよー」

綾 「軽いなあもう。私ね、今日部長から関東エリア支部長になれって言われたんです」

真・トム 「えーっ!」

ト 「だって、決まるの半年くらい先って言ってませんでした?」

綾 「それが突然の今日ですよ。しかも引き受けたら、来月からいきなりアメリカに飛ばされます」

ト 「アメリカ?どうしてですか」

綾 「ビジネススクールに通わされるんです」

ト 「そんな!じゃあ、つまりあの、その!(ラビさんに目配せ)」

真 「いや、関東エリア支部長ってめっちゃ凄いやないですか。アンタ、一体僕の何倍の所得を」

綾 「それどころじゃないんです!」

真 「ひえっ」

ラ 「そうだよな。小田さんはどーすんのってことだよな」

綾 「ちょーラビさん!いきなりばらさないでくださいよ!」

真 「えっ、小田さんって誰です?恋人?」

綾 「うるさいっ!」

綾乃、バッグを真に投げようとする

真 「ひえっ!」

トム、カウンター越しに綾乃を止めながら

ト 「綾乃さん、ブレイクブレイク！ひとまず落ち着きましょう」

綾 「私、今めっちゃ混乱してます」

ラ 「綾ちゃん、分かるよ。でも一息おいて。そこは口をパクパクしている真くん。君には何があったの？」

真、我を取り戻したように

真 「はっ。僕もそうだった！」

綾 「僕も？」

真 「初の昇進です。大阪に飛ばされることになって」

トム、綾乃 「えーっ」

ト 「それって転勤を伴う話だったんですか？」

真 「僕もそうとは知らなくて。だからー」

綾 「ちよっと待って。その年で昇進が初？」

真 「はい」

綾 「ウソ信じらんない！」

真 「アンタみたいなエリートとは違うんです！やつはバカにするじゃない」

綾 「だって、十五年で初って、ねえ？（ラビに目配せ）」

ラ 「人間だれしも自分のペースってのががあるからね。綾ちゃんだって、二十八年生きてきて、初じゃない」

ト 「おっと」

綾 「ちよ！それ言わないで」

真 「初？まさか、その小田さんって人と？」

綾 「うるさいっー」

真 「ひえっ！もうやだこの人」

ト 「それより真さん、転勤ってことはつまり」

ラ 「ノブさんはどーすんのって話だよね」

真 「それなんです」

綾 「ノブさんって？」

ラ 「彼の学生時代の先輩だよ。芸人目指してた」

綾 「おっ、おっ」

真 「やっぱそういう反応になりますか」

綾 「いえ、夢を追うことは素敵なことだと思えますよ！うん」

綾乃、真の顔を覗き込むが、真、凄いい顔をしている  
綾乃、ちよっと慌てて

綾 「で、そのノブさんって人が真田さんの昇進と何の関係が」

ラ 「真っちゃん、彼にコンビ組んでくださいって言えたの？」

綾 「はっ？コンビ？どういうこと？」

真 「うーんそれは」

ト 「いやはや、お二人ともまた難しい展開になってきましたね」

ラ 「今夜は楽しそうだ」

真 「もうラビさん！」

綾 「楽しんでる場合じゃないんですって」

ラ 「おっと失礼。でもねー」

ト 「ラビさん！お二人の言う通りですよ。綾乃さんと真さんの人生のターニングポイント、我々も責任重大です」

ラ 「そうだね。でもま、安心したまえ。ウチのトムくんが君たちの行くべき道をバシッと決めてくれますから」

ト 「ちよっと！私に全部ぶらないでくださいよ！」

綾 「トムさん、お願い！」

ト 「ええっ」

真 「僕も頼みます！」

ト 「ああ二人とも。えーっですわね、じゃあまずは——」

BGM (ピアノ曲) 流れる

照明・段階を踏んで暗転 (1・2・3・上) の順。

BGM、数秒でフェードアウトしたら、ライト点灯 (2・3)

トム、ドアを半分開け放した状態で、外に向かっている

ト 「はい！お二人とも、悔いのないようしっかり！何も捨てちゃダメですよ！  
きつとうまく行きます！」

トム、バースペースに向かいながら

ラ 「トム君、お疲れ様」

ト 「お疲れ様です。今日は大変でしたね」

ラ 「うん。二人ともおつきな選択を迫られてたね」

ト 「はい。でもなんで人間ってのは、選択肢がたくさんあると、どれを捨てるかで悩んじゃうんですかね」

ラ 「その気持ちはわかるんだけどね。トム君だってそうでしょう？」

ト 「ええ。もう重々」

ラ 「だからこそトム君は二人をほっとけないんだよねー。それより2人のあの動き、気付いたでしょ？」

ト 「ええ。だから尚更焦っちゃって。私なりに何とか背中押してみたつもりですが、どうでしょうか」

ラ 「うんうん。二人とも最後はちゃんと次やるべきことを決めてたからね。トム君グッジョブだよ」

ト 「それを聞いてちょっと安心しました。あとは」

ラ 「綾ちゃんも真つちゃんも、相手からどんな答えが返ってくるかが問題だね。こればかりは私たちが干渉できないからなあ」

ト 「ええ、二人とも本当にうまく行ってほしいです。私、いまだにきゅってなるんです。似たような境遇にいる人を見るたびに、毎回」

ラ 「分かるよ。こういう時は誰だって不安定だからね。でも、トム君が来てからずいぶんたくさん人がここに來てるけど、なんだかんだまだ一度もないじゃない？」

ト 「ええ、それはまあ」

ラ 「それは君の気持ちが出来た人たちちゃんと伝わってるってことだよ。だから私はトム君がここにいてくれて本当に良かったと思ってるのさ」

ト 「そう言ってくれますか」

ラ 「うん。私のミルクの出番も減ったしね。でもま、今回も一応用意はしとくけどね」

ト 「はい。お願いします。でも願わくは、もう二人がここに來ないといいですね」

ラ 「そだね。(ラビ、扉に向かって突然)綾ちゃん、真つちゃん、ファイター！」

ト 「ファイター！」

ライト・暗転

## 第二幕

ライト・点灯(1・2・3同時、そのあと上)

トム、部屋を箒で掃いている。ラビの姿はない。

ト 「ラビさんどこいったんだろ。メモとか残してくれればいいのに」

綾乃、ドアを眺めあげるように登場。やけにでかい帽子を被っている。顔面蒼白。

ト 「あつ、綾乃さんー！」

綾 「トムさん……どうしよう」

放心状態で舞台中央に来て、へたり込む

トム、しゃがんで綾乃の肩を掴みながら

ト 「ちよっ、どうしたんですか？」

綾乃、トムを見上げて、帽子を脱ぐ。ネコ耳が生えている。

ト 「げっ！」

綾 「朝起きたら生えてたんです」

ト 「どうしてー！」

綾 「こつちが聞きたいですよ。なにこれ」

ト 「ちよ、ちよっと失礼します」

トム、綾乃のネコ耳をさわる。綾乃、びくんと反応

綾 「やだぞわぞわするー！」

ト 「本物……ですね」

綾乃、自分でも耳を触りながら

綾 「やっぱ夢じゃないんだ」

ト 「つてことは綾乃さん……」

綾 「どーしよう。私、もう……」

扉、突然開く。

真、鞆を手前に持ったまま登場。めちやくちや息が切れてる。頭には変な帽子。

ト 「真さん！」

真、バーの入り口に立ったまま

真 「トムさん、大変です。僕いったいどうしたら」

トム、立ち上がりながら

ト 「真さんも来たつてことは……あっ、その帽子はまさか！」

真 「どうしましょう、これ」

真、鞆の裏から手を出す。猫手になっている。

ト 「そつちですか！じゃあ何ですかその帽子は！」

真、帽子を取りながら

真 「帽子？あつこれ、福引でもらった奴だ。(手に取り眺めながら)なんで被ってんだろ」

ト 「だいたいおバニくってますね」

真、鞆を床に落として、思い出したように

真 「それよりこれ！朝起きたらこうなってたんです！」

ト 「ちよ、ちよっと失礼します」

トム、真の肉球をさわる

真 「やだぞわざわざするっ!」

ト 「やはり本物ですね」

真 「顔面蒼白で肉球手袋を見せてくるアラフォー男子がいると思いませんか!」

ト 「そっ、それもそうですね。すみません、私も今、かなり動揺しています。どーしよう  
トム、部屋をうろつく

真、綾乃に気付く。

真 「はっ、綾乃さんも・・・げっ!」

綾 「私も朝起きたら、こうなっていました」

真 「同じだ。(うろついてるトムを捕まえて、すがりながら)トムさん、これなんです?  
ああもう僕いつたいどうすれば・・・」

綾乃も立ち上がって、トムにすがりながら

綾 「トムさん!なんでもしますから!助けてください!」

真 「僕もお願いします!」

ト 「どっ、とにかく一旦落ち着きましょう。こうなるとラビさんがいないとどうしようもありません。  
しかしラビさんは今出ています。ひとまず、彼女が帰ってくるまづできることを考えましょう」

綾乃、真、さらに喰い寄りながら

綾・真 「いや、でも」

トム、二人を押し戻すように

ト 「ひとまず、ひとまずお座りください。ねっ」

綾乃、真、席につく。座るや放心状態。

ト 「とりあえず、お水を」

トム、キッチンへ。その間も二人は放心

トム、二人に水を配って、テーブルの前に戻ってから

ト 「えーっと何から始めたものか」

ト 「まず、お二人にちゃんと saying おかなければならぬことが  
真、綾乃、ここでようやく我に返る

真・綾 「なんでしょう」

ト 「申し上げにくいんですが、綾乃さんも真さんも、  
今のままほっとくと最終的に猫になります」

真・綾 「はっ?」

真は立ち上がりながら

真 「トムさんみたいになっちゃうってことですか?」

ト 「いえ、完全な猫になります」

綾 「そんなバカな」

ト 「なりません。ラビさんの牛乳を飲まないで、確実に」

真 「完全に猫になっちゃったら、どうなるんですか？」

ト 「もう人間には戻れません。絶対に」

真 「嫌だそんなの！（真、どすつと座って頭を抱え）もうなんなのよ一体。これ夢じゃないんですか？」

ト 「真さん、お気持ちわかりますが夢じゃありません」

綾 「それよりラビさんの牛乳って？（ちよつと身を乗り出す）」

ト 「えーつと、つまりラビさんの牛乳には、猫になりかけの人間を救う力があるのです」

綾 「は？」

真 「なんですかそれ」

トム、テーブルの前を歩き来しながら

ト 「えーつと、動物になった人を救うというか、悩める人を導く力といえますか」

綾乃、立ち上がって

綾 「もうちよつと何言ってるかよく分かりません。頼むからちゃんと説明してください」

ト 「ごめんなさい、実は私も詳しくは聞かされていないのでよくわからない部分も多くて。（さらに反応しようとする綾乃を止めるように）ただ、ラビさんの牛乳はこの世のものではありません。それだけは事実です」

真、立ち上がりかけて

真 「んなバカな！」

トム、真を抑えながら

ト 「真さん、とにかく信じてください。今はもう時間ありません。」

真 「でも」

綾 「真さん！私たちがこんなになっちゃってる時点でもう色々おかしいじゃないですか。トムさん、（腰を下ろして）私は信じます。だからその先を教えてください」

真、頭を抱えながら

真 「うー」

綾 「でも、トムさんの言ってることが本当なら、私たちも今までラビさんの牛乳を飲んでたってことですよね？」

ト 「はい。ラビさんの牛乳は神聖なものですが、力が強すぎて人がそのまま飲むと体に障ります。今までお二人に出していたのは、普通の牛乳に少しだけラビさんのそれを混ぜたものだったんです。それくらいなら、むしろ悩める人にとっての活役に」

真、頭抱えモードを解除して

真 「この牛乳飲んだ後、なんか元気になる気がしてたけど、そういうことだったのか」

ト 「はい。ラビさんから言付かった調合で混ぜてたんです」

綾 「でも、こんなになっちゃったら、それじゃ足りないんですか？」

ト 「はい。おそらく。完全にネコになる前に、ラビさんの牛乳をそのまま飲んでみるしかありません。」

一種のショック療法というやつですでしょうか。危うい賭けですが、お二人が戻るにはそれしか」

綾 「そんな」

真 「そもそも、なんで僕たちはこんなになっちゃったんです？それも知ってるんでしょう？」

ト 「えーっとそれはですね」

トム、反対側に移動しながら

綾 「それより先に、とにかくラビさんを選んできてその牛乳を飲ませてくださいよ！私、朝からなんかお腹のあたりがすごい気持ち悪くて」

真 「それ僕も思っていました。確かに、詳しい話より先に、早くこれを何とかしたいです(肉球を振りながら)」

ト 「それが——」

綾・真 「それが？」

ト 「今のお二人はラビさんの牛乳を飲んだとしても、多分もとには戻れません」

綾・真 「はあっ？なんでですか」

ト 「ここで改めておたずねしたいんですが、お二人は、あの後、うまく行かなかったんでしょうか？」

真 「うっ……」

綾 「それは……」

ト 「やはりそうですか。  
というのですね、ラビさんの牛乳、心にしこりがある状態で飲んでも効果がないんです。むしろ悩みや迷いがあるまま飲むと、すぐ猫になってしまいう危険すらあります」

綾 「そんな……」

真 「じゃあどうすれば」

ト 「今ここで、お二人が抱えている問題を無くすほかありません」

綾 「そんな無茶な」

真 「今から？無理ですよそんなの」  
真、体を背ける

ト 「でもやらなきゃいけないんです」

真 「いや、こんな辛いのに、そんなすぐ精算できるわけが」

綾 「私も。もう心も体もおかしくなりそうなんですよ」

ト 「お二人とも一筋縄じゃいかないのは重々分かります。とにかく早くラビさんが帰ってくるまで、お二人になにがあったか聞かせてもらえませんか」

真・綾 「僕・私」

真・綾 顔を見合わせる。

ト 「お気持ちは分かりますが、一人ずつお願いします」

真 「・・・お先にどうぞ」

綾 「それじゃあ、私から。前回この店に来た次の日、上司に関東エリア支部長の昇進を受けますと告げたいんです」

ト 「ついにご決断を。では、一年間のアメリカ行きは決まったってことですね」

綾 「はい。そして、その後小田さんのライブに行きました」

真 「初恋の彼ですね。結局行ったんですね」

綾 「ええ。でも直前まですごく悩みました。昇進を受けた以上、もうどうしたって一年は離れちゃおうし。でも、やっぱり彼と一緒にいたいって気持ちが消えなくて。とりあえず会いに行かないとって」

真 「それで、何かしらアクションはおこせたんですか」

綾 「いつもの場所で、いつも通り穏やかで優しい小田さんに会って、改めて心が固まりました。もう回り道なんかしないで、想いを伝えちゃおうって」

ト 「なんと!」

真 「そこまで腹をくくったのに、いったい・・・」

綾 「小田さんの声は、いつもより伸びやかで力強く響きました。なんか小田さんも私の覚悟を受け入れてくれているような気がして、胸が熱くなって」

ト ム、真、うなずく

綾 「ライブが終わったら、彼からの挨拶を待たずに言うつもりだったんです。でも——」

真 「でもっ」

綾 「彼、歌い終わってすぐに私を呼んだんです。『東条さん、お伝えしなくてはならないことがあります』って」

ト 「へっ」

綾 「そんなこと初めてだったから、ビックリしちゃって。いつもの優しい声だったんですけど、『しなぐてはならない』って言い方が」

ト 「引っかかりますね」

真 「そっ、それで、彼はなんとっ」

綾 「——『福岡へ行くことにしました』って」

真 「はっっっ」

ト 「福岡——ですか?なんでまた?」

綾 「昔彼が組んでいた女性が福岡にいるらしくて、もう一度彼と歌いたかって、呼び寄せたんだそうです」

真 「あー」

ト 「その女性は、その・・・小田さんとどうい関係なんですか？」

綾 「分かりません」

ト 「詳しく聞かなかったんですか？」

綾 「もう頭真つ白になっちゃって。それに、彼すっごい嬉しそうに話すから。そうなんです、がんばってください。応援してます。それしか言えなかった」

ト 「そんな！」

真 「彼は、いつ行ってしまうのです？」

綾 「明後日です」

真 「明後日！」

ト 「急ですね」

真、トムを見ながら  
真 「じゃあもう会えないじゃないですか！」

トム、真に目配せする  
ト 「真さん！」

綾乃、目を覆って何かに耐えている  
真、トムを見ながら

真 「だっ、だっ、小田さんって、ひと月に一回しかライブやらないって」

綾乃、ふるえた声で

綾 「明日、東京でのラストライブやるから、来てほしいって言われました」

ト 「本当ですか？(トム、綾乃の側に移動しながら)じゃあまだ希望は」

綾 「行きません」

ト 「ええっ何故です？」

トム、膝をついて綾乃をのぞき込む

綾 「だって、今更行ったって、もう遅いです」

ト 「でも、まだ小田さんとその女性がそういう関係と決まったわけじゃないですし、何よりまだ綾乃さんも想いを伝えられてないんじゃないでしょうか？」

綾 「もういいんです。私は仕事に生きることを決めました」

ト 「ちよっと待ってください。それはまだ早ー」

綾乃、トムの言葉をかき消すように

綾 「もうやめてくださいー！」

トム・真 ビックリ

綾乃、ここにようやく顔を上げて  
綾 「やっぱ私には恋なんて無理だったんです」

綾乃、真やトムに話しかけ始める

綾 「冷静に考えて、バカげてますよね。この歳になって好きな人一人できたことない女が、今から仕事で一番忙しいポジションについて、仕事もやりながら、お互いのこと全然知らない相手と一緒にいたいなんて。しかも遠距離で。」

ト 「でも綾乃さん、どちらも諦めたくないって、こないだあれほど」

綾 「そんなの無理でした。やっぱり全てを手に入れるなんて出来ないんですよ。どれも手を出そうとした結果これです」

ト 「やってみないと分からないじゃないですか！」

綾 「分かりますよ！それくらい私にだって！小田さんには私なんかよりずっと前から彼の良さを知ってる女性がいって、その人のために生活の拠点を移せるくらい強い繋がりがあって。勝てる訳ないじゃないですか。今までただ見ていることしかできなかった私に、新たな道を行こうとする彼の人生に割り込む資格なんて」

真 「その気持ち・・・すごく分ります」

綾 「えっ？」

真 「僕も、同じなんです」

ト 「真さんも——ですか？」

綾乃、体を真に向けて

綾 「今の生活とお笑いの夢、どちらも諦めたくないって言っていましたよね。どうなったんですか」

真 「この店に来た次の日、結婚とか仕事とかの兼ね合いをひとまずおいて、まずノブはさんにコンビを組んでくださいって言おうと思ったんです」

ト 「一番難しいところから行ったんですね」

真 「はい。でもノブさんならきつと乗ってくれるだろうって確信がありました。

このタイミングで彼と再会できたのも、神様がもう一度芸の道をやってみなさいって言ってくれてる気がして」

ト 「私も絶対そうだと思いますよ」

真 「次の日が丁度ノブさんがシフトで会社に来る日だったから、

早速仕事終わりに時間をくださいと伝えました。

『なんやお前から誘ってくんの、大学でコンビ断られた時以来やな。トラウマフラッシュユバツクや』なんてケラケラ笑いながら、嬉しそうに乗ってくれました」

綾 「それ以来だったんだ」

真 「はい。だから十五年越しに、ノブさんにあの日は違う返事が出来ると思うと、嬉しくて。

——でも」

綾 「でもっ」

真 「居酒屋で乾杯したら、ノブさんいきなり

『ちょうどよかった。俺もお前に話したい事あつてん』  
って切り出したんです」

ト 「ん？」

綾 「同じだ」

真 「ノブさん、長年つるんでた後輩とコンド組むことにしたんだそうです」

ト 「ええっ」

真 「向こうから誘われたんだそうです。こないだもいいましたけど、ノブさんも今ちょうど相方を探してて。よく知ってる後輩からの誘いは渡りに船だったと」

綾 「じゃあ、ノブさんからの返事はノーだったんですか」

真 「・・・そもそも、僕と組んでくださいって言えませんでした」

ト 「なぜです！まだ正式にその後輩さんと組むと決まったわけじゃないんでしょう？」

真 「でも、もう決まったようなものですし」

ト 「真さんの気持ちを聞いたら、変わるかもしれないじゃないですか」

真 「いや、もういいんです。僕は地道に会社員として生きることを決めました」

ト 「真さん、なぜそんなことおっしゃるんです。お笑い、十五年も消せなかった夢なんじゃないですか？もう一度ノブさんと」

真 「もういいんです！」

綾乃、トム、びつくり

真、綾乃やトムに向かって話し始める

真 「だってそうでしょう？綾乃さんの言葉そっくり借りますけど、僕よりずっと長くノブさんのお笑いを近くで見えてきた理解者がいて、信頼関係はつちりノリノリでコンドを組むことになって。十五年前、ノブさんを切り捨てて安定した道を選んだ僕が、今更お笑いやりしましょうなんて、言える訳ないじゃないですか！」

ト 「いやしかし・・・」

真 「バカだったんです。僕も。自分だけ何も捨てずに、ノブさんの人生を、夢を、僕の都合に引きずり込もうとしていた。こんなの許されるはずがない」

綾 「真さんは、ノブさんに何も言わなかったんですか」

真 「僕が来年結婚すること、昇進して大阪に転勤になることだけを伝えました」

ト 「ノブさんは、なんと」

真 「ノブさん、まっすくな腫で、『真っちゃん、お前は今幸せか？』って聞くんです。かるうじて『はい』って答えたら『良かった！お前が幸せなのが一番や。これからも一生応援するで』って祝福してくれました。もう切なくて切なくて」

綾 「めっちゃんくちやわかる」

真 「(綾乃を向きながら) でしょう？(視線をトムに向けて) 僕も悟りました。結局、全てを手に入れることなんてできないんですよ。捨てるつもりがなくても、手に入らない未来だってあるんだと」

綾乃もトムを向きながら

綾 「そうですね。トムさんは簡単に何も捨てちゃダメですなんて言いますけど」

ト 「私も——お二人の気持ちはよくよくわかるんです」

綾・真 「でしょう？」

ト 「でも、お二人の話を聞いた上で、敢えて言います。やっぱり何も捨てちゃダメです」

綾 「もういい加減にしてくださいよ」

真 「トムさんは僕たちを一体どうしたいんですか」

ト 「逆に伺いますけど、お二人は今後どうするおつもりですか」

綾 「仕事一本です。こうなったらドウ・イセコで上り詰めてやります。気力十分です」

真 「僕もしっかり身を固めて、家族のために生きることにしました」

ト 「お二人は、それで本当に納得できたんですか」

綾 「はい。他の道は潔く捨てるつもりです」

真 「ノブさんと後輩を応援しながら、立派な大黒柱になってやりますよ」

ト 「ではお二人はなぜ今、強く嫉妬してるんですか」

綾 「えっ」

真 「なんでそれを」

ト 「やはりそうですか。その嫉妬、綾乃さんは小田さんの相手の女性に、真さんはノブさんの後輩に、ですよ」

観念したように

綾 「はい。そりゃそうですよ」

真 「みっともないですけど、滅茶苦茶」

綾 「なんでわかったんですか」

ト 「というのもですね——」

ラ 「人が動物になつちやう時って、だいたい嫉妬が引き金なんだよ」

ト・真・綾 「ラビさん！(綾乃、真は立ち上がる)」

ラ 「ただいまー。いやいやいや、疲れましたよ」

トム、ラビに駆け寄りながら

ト 「ラビさん、今までどこ行ってたんですか」

ラ 「ん？普通に中野ブロードウェイでショッピングしてたんだよ」

ト 「なっ！この大変な時に」

ラビ、トムをスルーして定位置に行こうとする。道中、立ち止まって

ラ 「おや？」

ラ 「二人とも立派なものがついてますね」

真、綾乃、ラビに寄りながら

綾 「ラビさん、よかった」

真 「これ、どうにかしてください！」

ト 「ラビさん、牛乳は」

ラビ、真・綾乃に向かって

ラ 「うん。君たちは運がいいね。ギリギリ二人分溜まったんだ」

綾 「じゃあ、まだ元に戻る可能性は」

ラ 「ありますとも」

真 「やった！」

ラ 「ただ」

綾・真 「はい」

ラ 「今のままじゃダメだってことは、もうトム君から聞いているよね？」

綾・真 「ええ」

ラ 「さっきも言ったけど、君たちが今猫になりかけてるのは、その心の底にある強い嫉妬が原因だよ。それをなんとかしないと元には戻れない」

綾 「でも、どうすればいいんですか」

真 「このどす黒い気持ち、すぐ何とかしろって言ったって」

ラ 「簡単さ。君たちが本当に納得できる次の一手を見つければいい」

綾 「具体的に、何をすればいいんですかってことです」

真 「皆目見当がつきません」

ラ 「正直に言いますとね、それは私にも良く分らない」

真・綾 「えーっ！」

ラビ、椅子に座ってふんぞり返って

ラ 「だって、それは君たちが自分で見つけるしかないんだもの」

真 「そんな！でも、僕たち時間が」

綾 「今日答えを出さないといけないんでしょう？」

ラ 「うん。私の牛乳は一晚で消えちゃうからね。それに、次に溜まるのはかなり時間がかかる」

綾乃、ラビに背を向けて

綾 「うそだー」

真、椅子にへたりこんで

真 「もう絶対間に合わない。僕猫になっちまうんだ」

ラ 「まあまあそう悲観しなさんな。(ラビ、トムの方に向かいながら)君たち人間には、

こんな時にこそ使える素敵な方法があるじゃない」

ラビ、トムの肩をポンと叩く

ト 「そうなりますよね」

綾 「トムさん？どういふこと？」

ラ 「歴史に学ぶ、だよ」

真 「歴史？」

ト 「私がかつて、体が完全にネコになるところまで行きました。ギリギリのところを、ラビさんに助け  
てもらったんです」

綾 「えっ、そうだったんですか？」

真 「ああ、つまり」

ラ 「そ。君たちよりも少し先に起きることを知っている。(ラビ、椅子に戻りながら)綾ちゃん真っちゃんが  
どうすればいいかはわからないけど、トムがどうしてこの体になったか、ひとまず聞いてみたら  
どうかしら」

綾 「でも、トムさんこれまで絶対話してくれなかったじゃないですか」

真 「僕も、あんまりはぐらかされるから触れちゃいけない話なんだと」

ト 「すみません。あの時のこと、正直話したくないし、思い出したくないのです」

ラ 「トム君、毒を食らわば皿までだよ。人助けだと思っていっちょ頼むよ」

ト 「軽いなあもう」

綾 「トムさん！ぜひ聞かせてください」

真 「よろしくお願いしますー！」

ト 「はあ。わかりました。お二人とも、どうぞお座りください。

(呼吸を整え、意を決したように)話は五年ほど前にさかのぼります。

当時私は新卒で入社した出版社を一年たらずで辞めて、俳優を目指していました」

綾 「俳優？意外。トムさんそんな風に見えないのに」

ト 「いやはや」

真 「人のこと言えませんけど、また難しい道を」

ト 「いやはや」

綾 「学生の頃の夢をあきらめきれなかったとか？」

ト 「はい。夢への気持ちを引きずったまま、家と会社を往復するだけの毎日に嫌気がさして。安定はしているけれど地味な人生を送るより、芸術の世界で成功して、死んでも名が残るような人間になりたいと思っただけです」

真 「その気持ちは痛いほどわかります」

綾 「具体的には、会社を辞めてどうしてたんですか」

ト 「名のある劇団の養成所に入って、飲食店や日雇いのバイトをしながら毎日稽古稽古。その間を縫って脚本も書いてました。いつか自分の劇団を持ちたくて」

真 「生活は」

ト 「もちろん二十四時間お金と将来の不安がつきまといました。それでも、身を削ってやりたいことに打ち込む毎日、しびれるほど楽しかった。それこそ人生のすべてをかけてもいいと思えるくらいに」

綾 「でも、トムさんが今ここにいるということは、つまりなんというかその・・・  
そんな生活が、終わったってことですよね・・・」

ト 「はい。終わりました」

真 「きっかけは何だったんです」

ト 「好きになった女性が、トラブルに巻き込まれたのです」

真 「うーわ」

綾 「先を聞くのが怖い」

ト 「私もすでに辛くなってきました。でも、どうかお付き合いください。真さん、綾乃さん、ちょっと体をお借りしますね」

真 「えっ」

綾 「ああ、はい」

**照明・暗転 (上最初、1・2・3同時)**

— 第三幕 —

ト 「彼女の名は早苗。当時、駆け出しのアイドルでした。ちょっと前に流行った、地下アイドルというやつです。日雇いのイベントスタッフバイトで出会った彼女は、いつか売れることを信じて真っ直ぐ活動に打ち込んでいました。しかし、所属している芸能事務所は零細で、話を聞けば聞くほどに怪しい。早苗は地下アイドルの御多分にもれず、日々際どいファンサービスを強要され、神経をすり減らしていました。彼女は、精神的に不安定な毎日の相談相手として、私を頼ったのです」

**照明・点灯 (1・2・3同時、のち上)**

トム、ベータ、舞台で向かい合っている

ト 「哀惨殿、このへん・・・この辺りには人を喰う虎が出ると噂されて・・・人を喰う虎が出るとい噂です。ですからしばしあんぎょう・・・いや行脚を・・・」

ベ 「ダメダメダメ！全然セリフ入ってねえじゃねえか！お前、何年ここに通ってたんだ」

ト 「すみません！もう一度やらせてください！」

ベ 「もういいよ。お前はカットするから、おい誰か！入ってやってくれ！」

ト 「そんな！さっきは緊張で舌が回らなかっただけです！どうかもう一度」

ベ 「うるせえ！てめえはそこで突っ立ってろ！」

ベータ、はける。

トム、ため息を吐きながら机に向かう。脚本を手直ししている。

舞台袖から早苗登場

早 「フジくん」

ト 「早苗」

早苗、袖から机に歩いてきながら

早 「今日も稽古お疲れ様。どうだった？(席に着く)」

ト 「も、もうバツチりよ！そろそろ俺も本格的なデビューに向けてですね」

早 「さっすが！いやー楽しみですねえ！それより！もう聞いてよ」

ト 「またかよ。今度は一体何があったの」

早 「今日もライブだったんだけどさ、

今日からファンとの撮影オプシオンに馬乗りが追加されたんだ」

ト 「馬乗り？ファンの上にまたがって撮ること？」

早 「そうなの。社長がさ、これからはもつとファンと近い触れ合いで売っていくらう！とか言い出して」

ト 「何だそれキモ過ぎる。(トム、立ち上がって舞台奥手に行き、四つん這いになりながら)お願いします！」

早 「(早苗、笑いながら)もうやめてよ！こっちは大変なんだから」

ト 「ファンサービス、どんどんエスカレートしてるじゃない」

早 「しかもオプシオン料十二万円だよ？それなのに、どんどん注文入ってさ。今日一日で、知らないオ

ジサンに何回またがったことか。もう流石に辛いわ」

トム、立ち上がりながら

ト 「早苗、悪いことは言わない。そこはもうやめたほうがいいよ。

これから先、もつとひどいことやられるにきまつてる」

早 「だよ。でも——やっぱ夢諦めたくないし、他に行き場もないし。そりゃ今はこんなところで地下

アイドルやってるけど、いつかは抜け出してドラマとかに出てさ」

トム、席に戻りながら

ト 「その気持ちと熱意はわかるよ。でも」

早 「大丈夫だよ。フジくんのおかげで、社長とかしつこいファンのあしらい方も分ってきたしき。もう

ちょっと続けてみたいんだ」

ト 「そっか。ま、早苗がそういうなら。でも、本当に危なくなったら、すぐに俺を呼びなよ」  
早 「ありがとう。ほんと、フジくんがいてくれてよかったよ。じゃなきゃ私、今頃壊れてた」  
ト 「俺は今でも十分心配だ」

早 「大丈夫！いざとなったら、未来の売れっ子俳優に救ってもらおうよ！いや、脚本家かな？」

ト 「そっ、そうなればいいんですけどね」

早 「大丈夫、フジくんなら絶対できるよ。(早苗、原稿用紙を手にとって)私、フジ君の書いた話大好きなんだよね。いつか舞台でもドラマでも映画でも、私を主演に抜擢して頂戴！」

ト 「おうよ！(机に腕ついて)その時は馬乗りよろしく！」

早 「だからやめてって！(腕時計見ながら)あつ、私今からバイトだから、もう行くね」

ト 「おう！頑張ってるな」

早苗、はける

ト 「早苗は、そばで見ている危なっかしいところはあるけど、夢への気持ちはひたすら純粹でした。そんな彼女の姿は、とても眩しかった。そして彼女はこの通り、社会的地位も将来の保証もない私を信じて、頼ってくれる。早苗の存在は、不安定な日々を送る私にとって、希望そのものでした。会うたび好きになっていった。しかし——」

### 音響・携帯の音

トム、電話に気付いて、立ち上がりながら

ト 「はい！あつ、大家さん！家賃ですよね。本当にすみません！ええ。今月末にはなんとか二月分お支払いできると思うので！はい。すみません。重々分かっていきます。今回だけ、何とかお願いします。」

トム、引き続き電話をかけかえて

ト 「もしもし、母さん？今月も、あと三万円ほど貸してもらえない？うん。いや、毎度ごめん。でも、ようやくバイトも安定してきたからさ。来月からはなんとか大丈夫だと思っ。親父には黙っというて」

トム、携帯を切って、ため息交じり

ト 「当時私は自分の生活すらままならない身。早苗と一緒にいてほしいなんてとても言えなかった。でもいつか役者として成功して、彼女に胸を張って告白する。これがもう一つの目標でした。ところが——」

### ライト・減光(1・3同時に消す)

ト 「そんな悠長なことを言っていられない事態が起きます」

トム、机に向かって原稿を書いている

早苗、もう一度登場

早 「フジくん」

ト 「おお、早苗。ん？どした？そんな顔して」

早苗、とぼとぼ歩きながら席に来る。鞆落として、椅子に崩れるように座って

早 「グループ、解散だって」

ト 「はあっ？いきなりっ？」

早 「うん。今日急に言われた。でき、事務所も余裕ないから、寮も出て行ってほしいって」

ト 「んなふざけた話があるか！契約はちゃんと確認したの？」

早 「うん。難しいことは良くわかんないんだけどさ、契約書確認したらすすこい小さい字でアルバイトって書かれてて」

ト 「ウソだろ？そんな詐欺まがいの」

早 「信じらんないよね。でも、もう文句も言えないしさ」

ト 「だからやばいことなる前にとって。これからどうすんの？生活の当てはあるの？」

早 「ない」

ト 「じゃあどうすんのよー！」

早 「事務所から——歌舞伎町のキャバクラ紹介された。そこは寮もあるからって。次の仕事見つかるまではそこで面倒見てもらえって」

ト 「どこまで腐ってやがんだ！早苗、絶対乗っちゃだめだ。

それ、店に飼い殺されて抜け出せなくなるパターンだぞ」

早 「でも、他にあてもないし」

ト 「じゃあ、しばらく俺のところ……はいや。——寮を追い出されるのはいつなの？」

早 「来月末」

ト 「来月末……わかった。それまでに、早苗の生活を何とかするプラン考えるからさ。とりあえず事務所から離れる準備しといて」

早 「でも、フジくんも忙しいしその……大変なんですよ？」

ト 「いや、大丈夫。絶対何とかするから」

早苗、立ち上がった

早 「フジくん……ほんつとにありがとう。ごめんね。よろしくお願いします」

ト 「早苗、今日はもう疲れたる。帰って休んだ方がいいよ」

早 「うん。そうする」

早苗、はける

ト 「とは言ったものの、早苗の言う通り、今の私に彼女を救う力はない。ここに来て、初めて思ったんです。誰かを支えるために、堅実で安定した生活が欲しい。今まで毛嫌いしてきた地味な人生が、とたん魅力的に思えました。となると私に残された選択肢は、もう一つしかない。そう思いました」

**ライト・暗転(最初上、次に2消す)、数秒後ライトアップ(1・2・3)**

トム、頭を下げている。

ズ 「あ？なんだって」

ト 「辞めさせてください」

ベ 「今まで才能のねえお前をここまで面倒見てやったの誰だと思ってるんだ」  
ト 「すみません。でも、どうしても、どうしてももう続けられないんです」  
ベ 「ふん。てめえがこれまでキラキラした目で吹聴してた。夢、ってのは、その程度のもだったんだな。がっかりだよほんとに」  
ト 「へっ」  
ベ 「ま、いいや。てめえなんかいなくなったところまでやってやっだよ。とっとと出てけ」  
ト 「今までお世話になりました！」

### BGM・雑踏

### ライト・切り替え(上・1・2・3消して、4つける)

トム、椅子に腰かける。ベータ、出てきて奥に座る。

ベ 「で、今まで劇団員をされていたと。その間仕事は？」  
ト 「コンビニや飲食店でアルバイトを」  
ベ 「いやあ、言いくいんだけど、その歳でバイト上がりってのはちょっとねえ」  
ト 「いえ、私はその前に一度会社員を経験していますから！その点においては」  
ベ 「でも、その会社も一年ちょっとで辞めちゃったんでしょ？ウチに来て長続きしないとと思うよ？やりたいこともあるみたいだし」  
ト 「いえ、決してそんなことは！もう役者はきっぱり諦めましたから！」  
ベ 「分かりました、本日は以上です。結果は追って連絡しますから」  
ト 「よろしくお願いします！」

ベータ、はける

### BGM・スマホの音

トム、スマホを取る

ト 「はい！えっ、不採用ですか！ちょっとまってください！もう一度話を聞いてくれませんか！お願いしますー」

トム、ガックリ 再び電話

ト 「もしもし、母さん？今月ももう二万円ほど・・・うん。ごめん。でね、今もう一度就活してるんだ。うん。ちょっといろいろあって。今まで応援してくれたのにごめん。でも、もういい加減地に足つけるから」

ベータ登場。トム立ちあがって

ト 「どうしてかお願いしますー」

ベータ、無視して舞台上手に向かいながら

ベ 「ああ、はっはっ」

ベータ、立ったままで  
ベ 「君、いくつ？」

ト 「えっ、二十八です。これまでの職歴は」

ベ 「いや、いい。いつから来れるの？」

ト 「えっ？可能なら、来週とかからでも！」

ベ 「明日から来れる？」

ト 「へっ、明日ですか？」

ベ 「今ね、十人くらい一気に辞めちゃって大変なんだ」

ト 「十人も？」

ベ 「ああ。何か問題でも？」

ト 「いえ！来週から来ます！」

ベ 「言ったね。じゃ、最初はまあお茶くみからやってもらおうかな」

ト 「はっ、はい！よろしくお願いします！」

ト 「よっしゃ・・・これで、ひとまず早苗を」

ライト、上・2・3つけて、4を消す

トム、うつきうきで早苗を待つ。  
早苗、ゆっくり登場。超嬉しそう。

早 「フジくん！」

トム、早苗に駆け寄りながら  
ト 「早苗！聞いてくれ、俺」

早 「聞いて！私ね、もう大丈夫そう！」

ト 「えっ、どういうこと？」

早 「だから、生活、何とかなりそう」

ト 「は？あれから何があったの？」

早 「彼氏が出来たの」

ト 「えっ、何それ？」

早 「だから、その人がしばらく家に寄せてくれることになったの」

ト 「はっ？それで大丈夫って。早苗、またろくでもない奴に騙されてんじや」

早 「ううん。そんなんじゃないよ」

ト 「どこの誰だよ？」

早 「言えない」

ト 「言えないって。おい、早苗、悪いことは言わないから」

早 「だから違うって」

ト 「俺はお前を心配して言ってるんだ。早苗のピンチを利用して近づいてくる奴なんていっぱいいるにきまってるじゃんか」

早 「・・・山田源さんの」

ト 「は？山田源って、俳優の？」

早 「しっ！おっきな声で言わないで」

ト 「こないだ芥川賞もとった？」

早 「うん」

ト 「初シングルもミリオンセラーの？」

早 「そう。彼なの」

ト 「いやいやうそでしょ。同名同名」

早 「本当だよ！ほら！」

早苗、スマホを見せる

ト 「マジかよ。でも、どうやって」

早 「山田さんね、地下アイドルめぐりが趣味らしくて、私たちの最後の公演に、来てくれたの。終わっただ後、連絡先聞かれて。本当はタブーだけど、もう解散だしさ。全然いいやって」

ト 「いや、早苗、それって絶対他にも同じような女がたくさん」

早 「なんでそんなこと言うの！」

ト 「だって、そんなうまい話が」

早 「私もちよっと信じらんないよ。でも、とにかくしばらく彼の家に寄せてもらうことになったから、ひとまず大丈夫」

ト 「んなこと言ったって、すぐ追い出されたらどうすんだよ！」

早 「山田さん、そんな人じゃないから。それにね、私、次の事務所も決まったの」

ト 「マジで？？」

早 「まだ発表ないから言えないんだけど、おっきいところ」

ト 「山田源のつてで？」

早 「違うよ！イベントスタッフのバイトしてた時に、その事務所の人から名刺貰ったの。私たちのグループの解散をやって、正式に呼んでくれたの」

ト 「いやだから、そんなうまい話が」

早 「正直怖いよ、私も。こんなトントン拍子で状況変わって。でも、このチャンス逃したらもう次はないと思うから。フジ君に迷惑かけるわけにもいかないし」

ト 「いや、俺は早苗のためなら全然」

早 「それに、こうなったら山田さんの隣に胸張って立てるようになりたいしさ」

トム、力が抜けたように椅子に座りながら

ト 「トム、乾いたため息…そうかいそうかい。早苗がそう言うなら。ま、応援するよ」

早 「うん。今までいろいろと支えてくれて、本当にありがとう。フジくんがいてくれたから先が見えたといっても過言じゃないよ。フジくんも、絶対才能あると思うから、夢捨てないでね！」

ト 「いや、俺はもう」

早 「ん？あつ、ごめん、私このあとまたあるから。これからもお互い頑張ろう！またね！」

早苗、走り去る

ト 「なんだよ、それ。俺はお前のためにどれだけやったと・・・」

ト 「いや、早苗は絶対すぐ一人になる。その時また救ってやればいい」

**BGM・オフィス音**

トム、パソコン開く。ベータ登場

ベ 「よう、終わったか」

ト 「すみません、まだ少しかかりそうです」

ベータ、パソコン覗きこみながら

ベ 「てめえ、その歳でエクセル資料のひとつも作れねえのか！能無しの役者崩れが！」

ト 「すみません！今日は会社に泊まってやりますから！」

ベ 「つたりめえだバカ！終わるまで帰るんじゃないぞ」

ベータ、去る

**ライト・2消す**

**BGM 雑踏十会話**

女性の会話 「ね、最近出てきた市川早苗、超可愛いよね！」

「分かる！今度朝ドラ主演でしょ？楽しみ！」

ト 「いや、早苗は俺のところに絶対」

トム、クタクタで舞台前に出てくる

男の会話

「あの結婚式のCM、キョんキョんすんよな！市川早苗が可愛すぎて」

「山田源と出てるやつだっけ？あの二人、実際付き合ってるらしいぜ」

「やめろー夢壊すな！ちくしょーでもお似合いだよな！」

ト 「やめる」

**BGM** 徐々にボリニームアップ

男 「やっぱ才能ある人ってすげーよな」  
女 「俳優、作家、アーティスト、なんでもできるなんて」  
男 「それで可愛い彼女もいてさ」

ト 「やめる」

男 「あいつ、ほんと何もできねえよな」  
男 「仕方ないよ。売れない役者だったんだから」  
男 「夢破れた男ってのはみじめだねえ」  
男 「しよっぱいよなあ」

トム、鞆から脚本を取り出す

早(音) 「私、フジ君の作った話大好きなんだよね」

**BGM** ふっと消える

トム、脚本を破いて放り投げる  
ト 「やめるつつてんだろ！」

**BGM** 雑踏+「重し蟹」

ライト・上消す

ト 「うっ」  
トム、うずくまる。

ライト・3消し、暗転

トムの声、人の苦しみから、だんだん声が変わって行く  
ト 「猫の雄たけび」

**BGM** ネズミの声

トム、床を叩く音。その後、猫が噛みつく声を出す

ラ 「ダメだよー！」

**BGM** ネズミの声、消える

照明・ライトアップ(2・3)

ラビ、ネズミに噛みつくようにしているトムの肩を掴んでいる  
ラ 「食べたら、もう戻れなくなるよ」

トム、猫の声で泣く

ラ 「よしよし。大丈夫大丈夫。辛かったね。さ、ウチに来てミルクをお飲み」

照明・暗転

ラ 「はいはい爪を立てない。んーそうだね、戻るまではトム君って呼ぼうか。仲良くケンカしな」

— 第四幕 —

照明・ライトアップ（1・2・3同時、後から上）

- ト 「これが、私の顛末です」
- トム、散らばった諸々を片付けながら、服装整えながら
- 綾 「そんな、辛いことが」
- 真 「あつたんですね」
- ト 「お恥ずかしい限りですが」
- ラ 「でもあんときは本当に危なかったよ。ギリギリだったからね」
- ト 「それでも私はここまでしか戻れませんでした」
- ラ 「でも、ここまで戻れたってのがまず奇跡だよ。体が完全に動物になったら、  
たいていもう戻れないからね」
- 綾 「どうして戻れないんですか」
- ラ 「動物の体で何か一口でも食べちゃったらだめなんだ。でも、動物になって真っ先にやってくるのが食欲だからね。それこそ私がその場に居合わせるくらいじゃないと止められない」
- トム、ネズミを拾いながら
- ト 「ネズミに噛みつく直前、半分くらい人間の理性が残ってたんです。汚くて臭くて。でも、体が言うことをききませんでした。ラビさんが通りかかってなかったらきつとあれを」
- 綾 「やだ！」
- 真 「考えただけでぞっとしますね」
- 綾 「でも、トムさんが完全にネコにならずに済んだってことは、心の問題を無くせたってことです」
- ラ 「んー、トム君の場合、猫になった時点で何がダメだったのか、彼なりに十分理解してたってのがポイントかな」
- ト 「それはあると思います」
- 真 「何がダメだったんでしょう」
- ト 「何も捨てちゃダメだったんですよ。私、何かを手に入れるためには何かを犠牲にしなくちゃいけないって思い込んでたんですが、全然違った。何一つ諦めちゃダメだったんです」
- 綾 「でも、みんなそう言うじゃないですか。全部やるなんて無理だって。実際トムさんだって、仮に山田さんがいなかったとしても、役者を諦めないと早苗さんを救えなかったじゃないですか」
- ト 「私もそう思っていました。でもそれが間違이었다。私は夢を諦めて早苗さんを救う道じゃなくて、どちらも救う方法を死ぬ気で考えるべきだったんです」
- 綾 「あの状況でそんな道があるとはとても」
- ト 「だっていたんですもん、夢みたいなことを、全部叶えてる人が。実際に」
- 真 「そりゃ山田さんみたいに才能がある人なんて」

ト 「もちろんごく少数だと思います。でも、山田さんも私も同じ人間です。最初から何も捨てない気持ちでいさえすれば、私にだってできたはずなんですよ」

綾 「でも気持ちだけ持ってたって、上手くないこともあるでしょう」

ト 「もちろんです。人間だれでも失敗します。失敗をゼロにすることは不可能です。私のように大事な何かを犠牲にしても何も手に入らないパターンだってさらにある。でもだからこそ、いつでも何も捨てない気持ちでいることが大事だと思うんです」

真 「それがよく分からないんです」

ト 「失敗を無くすことは出来ませんが、失敗の行く先を決めることは誰にでもできます」

綾 「失敗の行く先？」

ト 「失敗を終着点とするか、通過点とするかです。大事な何かを切り捨てて失敗した場合、身を削る思いで選択したのに、望むものが手に入らなかった時の痛みは尋常じゃない。全てが無駄だったんだと絶望し、喪失感と、後悔、何よりそれをすでに手にしている人への嫉妬で狂うほど苦しみます」

真 「人間でいるのが嫌になるくらい、ですか」

ト 「まさにその通りです。でも何も捨てない心でいさえすれば、何度失敗してもそれは自分が望む未来への通過点だと思えます。どんなに痛くても、歩みが止まることはありません。それどころが失敗をばねにもつと遠くへ行けるかもしれない。どうせ同じ失敗をするなら、最初から何も犠牲にしないつもりで生きる方がいいに決まっています」

綾 「そういうことか。その発想は・・・なかったかも」

真 「だからトムさんは、何も捨てるなどあれば」

ト 「そうです。早苗さんも救って、役者としても成功して、生活も安泰。山田さんがやってのけたように、そんな夢みたいな道も、探すことを諦めなければ見えたはずなんです。でもこれに気付いた時、私はすでに猫の体。心の底から悔やみました。もう一度、人間に戻りたい。もう一度やり直したいと」

ラ 「その強い想いがあったからこそ、トム君は戻ってこれたのさ」

ト 「それでも私は、ラビさんの牛乳をもってしても完全な人には戻れなかった。だから私は、綾乃さんと真さん、いや、もう誰一人として僕と同じ目目にあってほしくないのです」

真 「トムさん、そこまで僕たちのことを」

綾 「なんか、愚痴ばかり言ってごめんなさい」

ト 「いいんです。私もかつてはそうだったんですから。でも、真さん、綾乃さん」

真・綾 「はい」

ト 「お二人はまだ、間に合います」

真 「そう・・・でしょうか」

綾 「今から全部手に入れる道、まだあると思いますか」

ト 「もちろんですとも。だってお二人はまだ何も失っていないんですから」

真 「そっか」

綾 「まだ失ったわけじゃないんだ。自分で決めつけてただけで」

真 「このまま何もやらずに猫になるわけにはいきませぬね」

ラ 「じゃあ、二人とも次の一手は決まったね」

真・綾乃、互い顔を見合わせてうなずく

ト 「綾乃さん」

綾 「はいっ」

ト 「明日、小田さんのライブに行きましょう！」

綾 「・・・わかりました。とにかく彼にちゃんと気持ちを伝えてみます。どうなるかわからないけど、今なら、どんな結果も受け入れられそうです」

ラ 「うんうん。それがいいよ」

ト 「真さん」

真 「はいっ」

ト 「明日、ノブさんをもう一度誘ってください！」

真 「そのつもりです。もう、こうなりややけです！僕も愛の告白をする気持ちで行きます」

ラ 「あはは、なんかむさくるしいけど、それがいいそれがいい」

ト 「お二人とも、よく言ってくれました！」

ラ 「トム君、もう二人とも、大丈夫だと思おうよ」

ト 「あーよかったー！うーわきつつかった。でもよかった！」

綾 「トムさん、話聞かせてくれて本当にありがとうございます」

真 「僕も。おかげで胸のつかえが消えました」

ト 「どんでもございます。素敵なお二人が猫になっちゃうなんて、私も嫌ですから」

ラ 「じゃあトム君、牛乳、お願いね」

ト 「はい。心して準備致します」

トム、はける

綾 「うわーでもなんか、ラビさんの牛乳飲むのドキドキするな」

真 「あの話を聞いたら尚更ですね。ちゃんと戻れるかな」

ラ 「まだ、戻れると決まったわけじゃないもんね。やってみないとわかんないからな」

真 「怖いこと言わないでくださいよ！」

ラ 「ごめんごめん。でもまあ、今まで私が見てきた限りじゃ、多分大丈夫。多分」

綾 「多分って・・・ラビさんも確実にはわからないんですか？」

ラ 「私もそこんとこ詳しくは聞かされてないからね」

綾 「もう！一体誰と何のやり取りしてるんですか」

ラ 「ふふふ、それは秘密ってやつさ」

真 「でもそういえば、なんでネコなんでしょう」

ラ 「なんでだろうね。最近は何コが多いね」

綾 「えっ、ってことはネコ以外のパターンもあるんですか？」

ラ 「うん。例えば昔なんかはね、虎になっちゃう人が多かったんだ」

真 「虎、ですか」

綾 「それってもしかして、山月記？」

ラ 「おっ、良く知ってるね」

真 「山月記？」

綾 「国語の教科書に載ってませんか？昔中国で、超優秀な官僚のオッサンが、仕事辞めて詩人になろうとして失敗して、虎になっちゃう話」

ラ 「あはは、説明超ざっくりだね」

真 「知らないなあ。でも確かに、パターンは似てるような」

ラ 「そのオッサンも、自分が傷つくのが怖くて他人にアクション起こすのを躊躇ってるうちに気付いたら全部失ってて、狂っちゃったんだ」

綾 「そうでしたねえ。高校の時はリアリティに欠ける話だなど思いましたけど」

ラ 「小説だと思って読むとね。でも、元ネタは実話なんだよ」

綾 「ん？舞台は千年以上前の話ですよ。なんでわかるんです？」

ラ 「あの時は間に合わなかったから」

真 「ん？どういふことですか」

ラ 「まあまあ、細かいことはいいいじゃありませんか。実際に猫になりかけてる君たちが何よりの証拠ですよ」

綾 「そりゃそうですけど」

真 「でも最近ってのは？」

ラ 「ここ十年くらいの話かな。ネコブームだからかな」

綾 「いくら日本人がネコ好きだからってそんな」

ト 「虎になるくらい激しく生きる必要のない時代、つてのもあるんじゃないでしょうか」

ラ 「それもあるかもね。確かに、生き死にかかっています、的なギラついた時代って、もっと獯猛な動物になっちゃうパターンが多かったな」

ト 「そうみたいですな」

綾 「もう二人の会話、どっからつつこんでいいか」

ラ 「さて内輪ネタはこれくらいにして、トム君、用意ができたみたいだね」

ト 「はい。緊張で手が震えましたが、何とか」

ラ 「あそっか、トム君用意するのは初めてだもんね」

ト 「ええ。ちゃんとできたかどうか…」

トム、綾乃・真に器をセット。竹筒を取るタイミングで

綾 「ああもう、怖いな」

真 「神様、お助け」

ト 「お二人とも、行きますよ。ご覚悟を」

竹筒から牛乳を注ぐ

綾 「これがラビさんの牛乳」

真 「いつもと容れ物も違いますね」

ト 「はい。これも神聖な杯ですよ」

真 「緊張するな。いただきます」

ラ 「ちよいまち」

真 「はいっ」

ラ 「ちゃんと心を整えてからのがいいかも」

真 「心を、ですか」

ラ 「うん。二人とも、まず姿勢を正して、目を閉じて」

ラ 「君たちは、自分の中の何が上手いかずに猫になりかけているのか、ちゃんと理解できたね」

真・綾乃 「はい」

ラ 「トム君の過去を聞いて、ぞっとしたよね。猫には絶対なりたくないと思った」

真・綾乃 「はい」

ラ 「そして自分が本当に望む未来と、そこに向かうために次何をすればいいかも見つかった」  
真・綾乃 「はい」

ラ 「君たちは明日から失敗を恐れず、幸せになるために生きていく。その覚悟はできたかい」

真・綾乃 「はい！」

ラ 「うん。いい返事だ。大丈夫だね。じゃあ、どうぞ」

真・綾乃 「いただきます」

真・綾乃、牛乳を飲み干す。

**照明・暗転(最初上・1・2・3同時)**

— 第五幕 —

**照明・ライトアップ(1・2・3、後から上)**

トム、店の掃除をしている。ラビ、買い物袋を携えて帰ってくる

ラ 「ただいま」

ト 「ラビさん、おかえりなさい。またプロドウェイに行ってたんですか」

ラ 「そうなのよ。でね、福引やってただけどき、超素敵なものが当たったのよ」

ト 「なんででしょう？水素水とか？」

ラ 「違うわ。ジャン」

ラビ、額縁を取り出す

ト 「げっ」

ラ 「いやあ、実は私、大好きなんですよ。イケメンだよねえ」

ト 「あの、ラビさん？」

ラ 「よし。せっかくだから飾っておこう。いつでも山田君の笑顔を拝めるように」  
ラビ、写真立てをカウンターに置く

ト 「もうーやめてくださいよほんと！(写真立てを伏せながら)ラビさん、たまにエグいネタかましてきますよね」

ラ 「ラビックジョークってやつさ」

ト 「ブラックジョークみたいに言わないでください。そういえば、真さんと綾乃さん、どうしてるでしょか」

ラビ、写真立てを立てながら

ラ 「今日二人来るよ」

トム、写真立てを伏せながら

ト 「ん？新しい人がですか？」

ラビ、写真立てを立てながら

ラ 「いや、真ちゃんと綾ちゃん」

トム、写真立てを伏せながら

ト 「えっ、今から？ってことは二人にまた何か」

ラ 「いやいや、あっほら」

真・綾乃、店に入ってくる。きよろきよろ見渡す

真 「あれ？にゃん月亭、確かここらへんでしたよね？」

綾 「うん。私もうろ覚えでしたけど、このあたりだったと」

真 「おかしいな、もう一時間近くうろついてんに」

真・綾乃、舞台中央に来ながら

綾 「ね。でもまさか、真さんも来るとは」

真 「凄いい偶然ですよね」

真、綾乃の髪を上げしげと眺める

綾 「なんですか？」

真 「耳、なくなりましたね」

綾 「ええ。(真の手を指差しながら)真さんの手も」

真 「いやあ、おかげさまで」

綾 「てことは、あの後、上手くいったんですか？」

真 「はい。あの次の日、ノブさんに改めて僕と組んでくださいって言ったら、即オーケーしてくれました。もう肩透かしかってくらいあっさり。」じゃあ早速大阪に引っ越しやな。後輩も引きずって」って」

綾 「凄いなノブさん。後輩さんは大丈夫だったんですか？」

真 「ええ、彼もノリノリでした。『ノブさんがそう言うと思って、もう三人分の新幹線買っときましたよ』って」

綾 「後輩も凄いですね笑。仕事とか結婚とかは大丈夫だったんですか？」

真 「これがまた家内もノリノリで。今は向こうで仕事しながらトリオで活動しています。職場も本場大阪なので、同僚がみんなこぞって応援してくれるんですよ」

綾 「うわー！なんか楽しそう！真田さん、雰囲気も随分明るくなりましたね」

真 「ええ。毎日楽しくて楽しくて。そういう綾乃さんはあの後、どうなったんですか？」

綾 「小田さんが組むって言ってた相方の女性、彼の従姉でした」

真 「なんじゃそりゃ」

綾 「もうなんか全身の力抜けちゃって。そのあとナチュラルに「好きです」って言ってしまいました」

真 「おお、行きましたね。で、彼の答えは？」

綾 『ちよつと待って、それ僕のセリフです。先に言わないで』って

真 「そつちもノリノリじゃないですか！」

綾 「ええ。それから一年アメリカと福岡で遠距離をして、来月から一緒に住むことになりました」

真 「マジですか！——初恋とは思えないハイレベルな展開ですね」

綾 「ちよつとバカにしてません？」

真 「んなことないですよ！素直にすごいと思います。ということは、綾乃さんも福岡へ？」

綾 「それが違つんですよ。彼と従姉さんが二人で上京してくるんです。付き合い初めて、半年くらいかな？小田さんたちの曲がネットで話題になって。大手レーベルから声がかかって、そのままメジャーデビューが決まって」

真 「すげえな！てことは、お仕事も」

綾 「もちろん、そのままです。私今、関東支部長様ですよ」

真 「ひえー。なんか色々話が出来過ぎてませんか」

綾 「ね。私も信じられないです。でも、お互いさまじゃありません？」

真 「確かに。一年前には想像もつかなかったくらい、うまく行ってます」

綾乃、ラビの方向を向きながら

綾 「私、ラビさんの牛乳がちよつとおまけしてくれたんじゃないかって思ってるんです」  
ラビ、綾乃に手を振る。綾乃は気づかない

真 「そうかもしれないですね。ラビさんの牛乳のんでから、僕も心なしかスマートになった気がします。腹回りとか」

綾 「それは気のせいですよ、多分」

ラビ、山田源の写真を立てる

真 「いや、素で反応しないでください。ボケです。つっこんでえな」

綾 「すつかり芸人が板についてきましたね。(綾乃失笑して顔を背け) あれ？」

真 「ん？どうしました」

綾乃、山田源の写真を真に見せながら

綾 「なんでこんなところに」

真 「あつ、山田源じゃないですか！じゃあこの空き地、やっぱり」

綾 「絶対そうですよね。移転したのかな」

真 「うーん、ここの連絡先とか聞かなかったからなあ」



ラ 「実は私も、そんな時代があったのさ」  
ト 「えっ、そうだったんですか？」  
ラ 「いやーあの頃はとがってたからね。いや、虎ってたか」  
ト 「あの、あの頃っていつです？」  
ラ 「言ったら年ばれちゃうじゃん。レディに失礼だぜ」  
トム、ラビに爪を返ししながら  
ト 「すみません」  
ラ 「ま、もはや BCBA 単位のカウントだから、私も良く覚えてないんだけどね」  
ト 「もう細かくつっこむのはやめときますね。それより、じゃあラビさんは完全に戻れたってことですか」  
ラ 「うん。すごい時間はかかったけどね。でもま、私は人間に戻るタイミングでこっちの道を選んじゃったから、今こんなことをやっているわけだけ」  
ト 「そういう経緯だったんですか」  
ラ 「そうなのよ。というわけで、トム君も大丈夫だよ」  
ト 「えー嘘だー」  
ラ 「いやいや、トム君だってその方がいいでしょう」  
ト 「いやー、私はもういつそのままでも」  
ラ 「ウソだー」  
ト 「えっ」  
ラ 「だって、まだ書いてるんでしょ？脚本」  
ト 「・・・ばれてましたか」  
ラ 「あたぼうよ。時間かかるかもだけど、先に進む意志があるならきつと大丈夫さ」  
ト 「そっか。そうなんだ」。脚本、完成したら読んでくれますか」  
ラ 「もちろん。楽しみにしてるよ。タイトルはもう決まってるのかな？」  
ト 「はい。『平成にゃん月記』にしようと思います」

照明・暗転（最初・上、2）

BGM・「猫になりたい」流れる

照明・ライトアップ（1・2・3）。BGM ちよつと音量ダウン、そのままエンドロール